

◇◇◇ 公 教 育 は 家 庭 教 育 に ◇◇◇ ◇◇◇ どこまで関与するか (1) ◇◇◇

『親ばか』ノススメ

岩 上 節 子

一日のなかで、どこまでが学校教育のテリトリーで、どこまでが家庭教育のテリトリーなのであるか。そんなことを考えざるを得ない時がある。大ざっぱには、『子どもが自分の家のドアを出てそこに戻ってくるまで』が学校教育のテリトリーに入るのはないかと考えているが、厳密には決めようがない。最終的には、子ども達一人一人が、日々の生活のなかでいろいろと感じ、考え、長い時間をかけて結論を出していくことだと思ふからである。

ところで、ある物事に関して、保護者の方から、「それを規則きまりとして伝達し、徹底してもらえないだろうか」という要望を出されることがある。たとえば、「幼稚園の帰りに寄り道をしないということを保つ守らねばならない約束事にしてほしい」とか、「小学校受験のためのお稽古事は必要ないとクラス懇談会で言っして下さい」と言うような……。保護者

の願っていることは、「規則きまりになつていれば、我が子にも他の人（子どもの友人やその親など）にもはっきりそう伝えることができ、親として、自分の家の方針を実現しやすい」ということなのだと思う。また、そのような申し出をしてくる保護者には、学校教育や家庭教育にとっても熱心で、これらを大切に行っている方が多いにも思われる。

もちろん、私自身保育者として、（基本的生活習慣を身に付ける上でも、気持ちの区切りをつける上でも）一度家に帰ってから遊びに行く方が良いと思っているし、また、現時点での子どもの要求に合わない早期教育やお稽古事は意味をなさないと考えている。だから、「そうですね……」と保護者の方の気持ちに共感することはできる。しかし、だからといって「それはやらない約束にしましょう」と決めつけられるほど子どもの毎日は拘子定規なものではないはずである。幼稚園が終わってからも

「友達と遊びたいなあ」と思う時に、お互いの家が往復一時間も二時間もかかるようなところにあつたならば、『友達と遊ぶ時は一度家に帰ってから遊ぶ』という規則があつたとしても、それは実現が不可能であろう。また、私自身も、お店屋さんごっこをしている子どもが急にメニューをつくりたくなつて、「字を教えてください」と頼んでくれば、それを教えてあげたり書いてあげたりといった援助をする。そういう内容のことを伝えてみると、「じゃあ、子どもから言い出した時はいいんですけど。」と切り返されることがある。

いいとか悪いとか、そういうことを言いたいのではない。確かに、子どもが何かに必要感をもってやってみようと望んでいる時は応援したいと思う。しかし同時に、何かに対する必要感もなく、無意識的に（もしくは自覚もなく）過剰している時には、もっと頭や体を使ってほしいと願って、意図的に刺

激したり提案したりもする。いつが子どもの背中を押す時で、いつが子どもの手をひっぱる時なのかは予測のつけようがないし、その場になっても判断しかねることが沢山あるので、もしそこに何か規則を作ろうとしたら、例外を沢山認めなくてはならない。しかし、例外を沢山認めなくてはならないことを規則にする必要性はないのではないだろうか。ある意味では、表面的な形から入ることの多そうなの『基本的生活習慣を身につけること』すらも、つきつめていくと必ず、その家庭なり、学校なり、子ども自身なりの価値観にかえていく。一人一人の価値観に関わることを規則として押しつけることは、望ましいことではない。学校教育のなかで、規則にできることなど、本当にわずかしかないはずなのである。たいていのことは、子ども達が自分で気付いて、考えて、本当に大切だと思ったら、自分で身につけていくしかない。学校教育は、規則を作つてど

うこうするよりも、子ども達に、より望ましいと思われる影響や刺激を与えるべく努力するものなのではないだろうか。学校教育は提案者にすぎないのである。

これまで述べてきたことは、私自身が日々の保育のなかで感じ、考え、今、大切にしようと思つて、努力していることである。そう考えて、今までを振り返ってみたら、こんなことを思い出した。

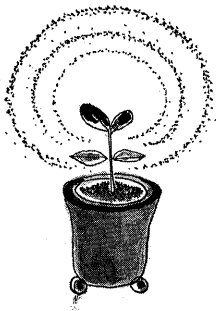
教職について一年目の初めての保護者会の前に、「自分の子どものことだけでなく、クラス全体の子どもことも考えるように、保護者に伝えることが大切だ」というようなアドバイスを受けた。自分でもそういうものだろうと思ひ、当日、「一人一人が幼稚園の大切な一員です。御自分のお子さんのことだけでなく、まわりのお子さんのことも考えて、幼稚園全体の子どもの親になるつもりで通つて下さい。」というようなことを保護者に向かって言った

覚えがある。しかし今は、「そんなことを言う必要はなかった」と思っている。

本来幼稚園というところは、家庭で思う存分親子のふれあいを楽しんで、満たされた上で、「もっといろいろな人と接したい、かかわりたい」と願い始めた子ども達に、そのチャンスを提供する場であると思われる。その性質上、保育者は、集団の中で子どもを見つめることを要求される。保育者の専門性は、そこに見出されるのであるが、同時に、限界もそこにある。人間は、その他大勢のなかの一人として公平に扱われているだけでは満たされない生き物だからである。たった一人しかない自分を、かけがえない存在だとして信じられることが必要なのだと思う。

幼稚園で子どもだけで生活していても、子どもはいつも心の中で問いかけている。「ねえ、おかあさん、これでいいのっ?」「こういうのってどう思う?」

「もし失敗しても応援してくれる?」「大丈夫だよね。」子どもの気持ちはいつも自分を本当に想っていてくれる人、大好きな人につながっていて、そのつながりがしっかりしていればいるほど、自由に



きいきと動き出す。

親は、クラスの中のたった一人の我が子のことだけを考えて、その子どものことだけに一生懸命になれるかけがえのない存在なのである。そのささえがあるからこそ、学校教育も本来の姿で機能できるのである。自分の目で真剣に自分の子どもことをみつめて考えている親は、自然に自分の子どものまわりの子どもにも目を向けていくだろう。我が子のことを誉めたり、好きだと言ってくれる人を、それだけで受け入れてしまうこともある。ある環境のなかで子どもが楽しそうにしていれば、そういう環境を守っていくと自然に努力してしまうこともある。社会全体のことを考えるようになる人だっている。保護者が保護者として、自分の気持ちに素直に、心の底から『親ばか』でいられることが、子どもにとって一番幸せなことなのではないか。「クラス全体のことを考えるように……」などという言葉を投

げかけた私は、親という存在を学校教育のなかで軽視していたのではないか。親が『親ばか』でいられるように応援することのほうが大事なのではないかと思うのである。今は、「先生、うちの子ってかわいくて……」と、親が自然に言えるようなクラスでありたいと願っている。

誰か（今回は、子ども）の悩みや、上手いかない辛さは、その人自身にしか乗り越えられない。それを見守る人間（今回は、保護者や保育者など）は、代われないだけに歯痒くて、何か手助けがしたいと思う。しかし、そう願って考えていくうちに、「自分（もしくは、まわり）に何かが欠けているから、上手いかないのではないか」と自分やまわりを責めたり、不安になったりすることがある。私自身、担任をしていてそういう気持ちになることがある。親ならなおさらであろうと思う。しかし、今なら、不安に揺らぐ保護者の方に向かって、「子ども

にとつて一番心強いのは、いつも自分を見守ってくれる視線があるということじゃないですか。」と伝えることができるのではないだろうか。なぜなら、親よりはずっと遠い存在の保育者でさえ、通りすがりにちょっとした目があつてニコツとするだけでお互いにうれしくて、気持ちしが和んだり遊びが盛り上がりたりすることが多いからである。子どもにとつて、自分の良さを本気で認めてくれる視線は最高の援助なのだと思う。何かを教えてあげるとか、いざこざの仲裁をするといったことよりも、たったそれだけのことができればいいと思つて保育をしているが、たったそれだけのことが、結構できない。見当違いの助言をしたり、注意をしてしまうことの方が多い。自分自身のゆとりのなさから、子どもの言い分に耳を傾けることができなくて、自分本位に気持ちをぶつけてしまうこともある。子どもに申し訳なくて、後悔して、反省して、自分にくやしくて、次の

日の朝の子どもの笑顔にほつとしてすぐわれて、「今度こそ、おだやかに……」と思つているのにまた失敗して……という毎日だが、一年目に比べ、子どもに本気で向かつていけるようになってきた自分が、今は、ちょっと心地良い。

いつでも、自分の目で相手をみつめること。自分の価値観をしっかりと持つこと。相手の価値観に気付くこと。自分と相手の価値観を比べてみる。教育関係の本や育児書などの、知らない誰かの価値観は、どうしようもない時以外は使いこなせないから必要ないと強がること……。そんなことを考えながら保育をしている。

(幼稚園教諭)